特258
447

菅原時保禪師

碧巖錄講演（其十一）

始

特 258
447

臨濟宗
建長寺派管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其十一）

昭和ミ年
大谷大學
圖書
校・總

碧巌録提講

第二十二則　雪峰驚鼻蛇

古句に、佛口蛇心、とある。如何にも〳〵。佛必ずしも佛に非ず。――蛇必ずしも蛇に非ず。――蛇そのまゝ即佛。――佛そのまゝ即蛇。――恁麼は何者か。知るべし、唯心の所造なることを。果して然らば、影に驚き響に迷ふ勿れ。形は我にあり、聲は自己。形正しければ、影隨つて正し。聲大なれば、響自ら大なり。苟も其響を大に、其影を正しうせんと欲せば、自己の佛に相見すべし。自己の蛇を打殺すべし。

◎垂示

垂示云、大方無外、細若隣虛、擒縱非他、卷舒在我、必欲解粘去縛、直須削迹呑聲、人人坐斷要津、箇箇壁立千仞、且道、是什麽人境界、試擧看、』

讀方

垂示に云く、大方は外無く、細きこと隣虛の若し。擒縱他に非ず、卷舒我に在り。必ず粘を解き、縛を去らんと欲せば、直に須く迹を削り、聲を呑み、人々要津を坐斷して、箇々壁立千仞なるべし。且く道へ、これ什麽人の境界ぞ。試みに擧す看よ。』

例に依つて垂示の説明を致します。

「大方無外」宇宙の大は無限大。到る處宇宙、見る處宇宙。宇宙の外に何ものもなし。總てが宇宙である。云ふもおろか、眞理は宇宙大、否、宇宙そのまゝが眞理である。眞理は神の心にして、又佛の本體、故に宇宙全部が神、宇宙總てが佛である。佛の外に一物あるなし。神の外に何ものもない。神と神とが即宇宙、佛と佛とが即宇宙。――「隣虛」是は佛教宇宙論の術語。極微子。今日で云ふ原子又は電子。字の上から見ても虛空の隣とあるから、虛空に相似て、肉眼にては空か物か分別なしがたし。それが隣虛の隣虛たる所以である。何をか隣虛と云ふ。

――「擒縱非他」殺すも活かすも、取るも捨つるも、一切自己にあり。然るに、已に迷うて物を逐ふ漢は、總ての權利を他に讓る。之を是れ、天上の月を貪り見て掌中の玉を失却する、と云ふ。愚に非ざれば鈍、鈍に非ざれば白痴。古往今來、白痴の人を以て充塞す。嗚呼。――「卷舒在我」是は、第五則の垂示に卷舒齊唱とある、それと同意義。一事他に非ず百事我にあり。我の宇宙、我の眞理、我の佛、我の神。我を除いて一物もあるなし。森々たる頭角、畫する能はず。――「粘」「縛」「迹」「聲」粘は粘著、――縛は束縛、――迹は痕迹、――聲は音聲。』以上何れも、相對的の文字、言句、行爲、それを表象する一箇の符牒であります。――「要津」彼岸即ち悟境に達するために舟出する港津の義、第二義門に屬する手段方法をさす、と井上君は示された。』云ひ得て妙。――云ひ換へれば渡り場、如何なる人も人生の往來には是非とも經過せねばならぬ處。其是非とも經過せねばならぬ處とは、決して遠きに非ず、極めて近い。――諸君御承知か。――御承知なければ坐禪しなさい。坐禪しなさい。――それが要津。――泰山は土壤を讓らず、故に大なり。河海は細流を擇ばず、故に深し。』宇宙は土壤と細流との集合、否、混合體。其大を語れば宇宙より大なるものなし。故に大は方處を絶す。其小を云へば又宇宙より小なるも

のなし。故に細は隣虚に入る。』――塵つもつて山となる。』水の滴り小なりと雖も漸く大器に滿つ。』塵を外にして宇宙なく、水を除いて宇宙なし。蓋し宇宙は塵の集合にして水の合集池である。大と云へば如何にも大なるが如く、小と云へば如何にも小なるが如し。其小なる點より云へば宇宙より小なるものなく、其大なる點より云へば宇宙より大なるものなし。――之是の極めて大而して極めて小なる宇宙そのものを、至つて手輕に、扇子を卷舒するが如く、無用意に楊枝を執捨するが如くになし得る力を所持して居る者は、宇宙そのものでなく、お互人間であります。其理由は、宇宙の爲の人間に非ずして、人間

の爲の宇宙である。故に宇宙を活用し宇宙を所理し宇宙を自由にする權利は、お互人間の掌握に歸して居る。然るに茲に御座るお互ばかりでなく、多くの人が古人の糟粕に醉ひ倒れ、先を爭うて自家の寶を失却し、競うて古人の是非、曲直、善惡、邪正等の言句や、擒縱、卷舒、抑揚、與奪等の動作に心眼を暗ましし、第二義門に屬する閑葛藤や荆棘林に束縛され、寧ろ使ふべき宇宙に却つて使はれつゝあるは、如何にも氣の毒でもあり殘念でもある。』本則の雪峰禪師、雲門禪師の如きは、天地と我と同根、萬物我と一體、と云ふ處に到達してをらるゝが故に、喫茶喫飯の上がそのまゝ、巨靈擡手無多子分破華山千萬重。』――

擘開華岳連天雪、放出黃河徹底清。』常に天關を廻らし地軸を轉じて居らるゝ。知るべし、擒縱は他に非ず、卷舒は我に在り。敢て擒縱の自由や卷舒の自在を雪峰禪師や雲門禪師に一任するに及びません。お互が大死一番、天地と我と同根、萬物我と一體、と云ふ處に妙達すれば、粘著を解かず、――束縛を去らず、――痕迹を削らず、――聲音を止めずして、自然に總ての音聲も痕迹も束縛も粘著も一切が一時に脫落し去る。――一時に一切を脫落した其場合、其境界、それを人々要津を坐斷、箇々壁立千仞と云ふ。――斯の如き唯我獨尊の境界に安心立命した人でなければ、眞箇の人間、眞箇の禪僧とは申されませ

ん。苟も人間と生れた以上は眞箇の人間に、苟も禪僧となつた以上は眞箇の禪僧に、共に俱になり、而して未だ眞箇の人間、眞箇の禪僧になりたきものであります。それには茲に、おあつらへの御手本がある。雪峰禪師南山鱉鼻蛇の本則がそれである。序に、從容錄二十四則、雪峰看蛇の話に萬松老人が垂示して居らるゝ、それを拜借して茲に添へて參考に供します。萬松老人曰く、「東海鯉魚、南山鱉鼻蛇、普化驢鳴、子湖犬吠、不レ墮二常途一、不レ行二異類一、且道、是什麼人行履處。」以上が萬松老人の示衆。更に落草して簡單に說明を加へませう。

「東海の鯉魚」僧あり、雲門禪師に「十方薄伽梵、一路涅槃門、未審路頭甚麽の處に在るや。」と問ふ。門云く、「扇子跩跳して三十三天に上り、帝釋の鼻孔を築着す。東海の鯉魚、打すること一棒すれば雨、盆を傾くるに似たり。會すや會すや。」是が鯉魚由來。

――「南山の鱉鼻蛇」是は本則の處で提講する故に茲では略す。――「普化の驢鳴」是は或日の黄昏、普化禪師が臨濟院に行き生菜を喫して居らるゝと、臨濟禪師が是を見て「這の漢一頭の驢に似たり。」と云ふ。普化、言下に於て驢の鳴き聲をなされた。それが來歴。――「子湖の犬吠」子湖巖の利蹤禪師が門前へ建札をして、「子湖に一雙の狗あり。上、人の頭を取り、中、人の心を取り、下、人の足を取る。擬議すれば喪身失命す。」と記された。それが子湖の犬吠。――

以上の鯉魚、鱉鼻、驢鳴、犬吠、の如きは禪機の活用、三昧王三昧、格外の人の力量、其縱横無礙底、其横拈倒用底。理屈や講釋や議論の遠く及ぶ處に非ず。佛魔と雖も只手を拱するのみ。――之是を常途に墮せずと云ふ。好んで異類のまねをなすに非ず。畢竟何人が恁麽の行履をなせし。それは本則に云うてある。』

◎本則

舉、雪峰示衆云、南山有一條鱉鼻蛇、汝等諸人、切須好看、

長慶云、今日堂中、大有人喪身失命、僧擧似玄沙、玄沙云、須是稜兄始得、雖然如是、我即不恁麽、僧云、和尚作麽生、玄沙云、用南山作什麽、雲門以拄杖、擲向雪峰面前、作怕勢、』

讀方

擧す。雪峰、示衆して云く、「南山に一條の鱉鼻蛇有り。汝等諸人、切に須く好看すべし。」長慶云く、「今日堂中大いに人の喪身失命する有り。」僧、玄沙に擧似す。沙云く、「須く是れ稜兄にして始めて得べし。然も是の如くなりと雖も、我は即ち不恁麽。」僧云く、「和尚作麽生。」玄沙云く、「南山を用ひて什麽かせん。」雲門、拄杖を以て、雪峰の面前に擲向して、怕るゝ勢をなす。』

此本則には、雪峰、長慶、玄沙、雲門、外に無名の一僧が活動して居ります。雪峰は第五則に、長慶は第八則に、雲門は第六則に、何れも既に出席してをられる。初舞臺の人は玄沙禪師一人、左に四人の法系を示してをきます。

以上、玄沙禪師は福州閩縣の生れ、年齢三十のときまで南台江で漁夫をして居られました。傳説に依れば、漁夫とは云ふものゝ普通の漁夫に非ず、一種の隱遁者と云ふことである。師の雪峰と玄沙は僅に十二歳の差、雪峰禪師と同年に示寂なされたとあります。』――「鱉鼻蛇」すつぽんの樣な頭をして居る毒蛇。雪峰山は福建省にあるからコブラがをつたであらう。必ずしも雪峰山には限らん。鎌倉の山にもをる。イヤ東京の眞中にもをる。――「切須好看」油斷大敵。

總て失敗は油斷が元だ。立つときは立つに注意し、坐するときは坐するに注意し、見るにも聞くにも、喫するにも呑むにも、語るにも默するにも、泣くにも笑ふにも、怒るにも喜ぶにも、注意々々。注意は無事安全を生むの母なり。――「喪身失命」毒蛇の話を聞いて大衆一同が恐怖して居ると云ふ意。されど多くの人は自己腹中の毒蛇の爲に事實喪身失命してをる。――お互も日に何回となく腹中の毒蛇に襲はれて喪身失命しながら知らずにをる。俗に云ふ不死身か。――嗚呼、なさけなや。――「擧似」似は類似の似でなく此處では示の意、擧似は手まね足まねをして話してきかせること、と井上君は云うてをられる。無論お説の通り。眞箇の興味を人に感ぜしむるには、是非とも手まね足まねをして話さなければ妙味は出現せぬ。空談、

虚論は始めより談ぜず論ぜざるがまし。――「須是稜兄始得」稜兄は長慶禪師のこと。あの慧稜君ならば大膽な男であるから好看することも出來る。他のものには出來まい。(長慶禪師は雪峰下の老狐、故に雪峰禪師の居る穴を能く知つてをる。)玄沙禪師の一句、所謂、言外に響あり。――「我即不恁麽」玄沙は玄沙だけの意見がある、決して人の尻馬には乘らぬ、と云うて一釣を下された。鯨がかゝるか、眼高がかゝるか。好悪、豫め期しがたし。――「擅向」なげつける、放擲。――平生お目にかゝらない字に逢着すると、衲の如き無學者は實に閉口。幸に先輩の書かれた本があるから、たどり〳〵往くものゝ、實は足の

下から蛇が出やしないかと常にびく〳〵して居る次第。――「作怕勢」ホラ茲に毒蛇がをるぞ、と拄杖を擅向しつゝ、是は大變、あゝおそろしや、と縮みあがる形容。聞く、東京の或る公會の席に於て、戯れに蛇五六匹婦人席に擅向して、其怕勢を傍觀して悦に入つて居る狂人があつた、と云ふ。蛇を擅向された御婦人方は如何に怕愕なされたか。――思ふだにお氣の毒である。されど、自己腹中に毒蛇のをると云ふことにお氣づかるゝお人は、千萬人中に蓋し一人あるなし。――重ねて臭口を弄すること左の如し。渾身泥水に入ることも、赤手空拳にして人を殺すことも、風なきに波を起し、事なきに事を生ずる

ことも、――要する處は大法の擧揚と、爲人度生の爲である。故に大法擧揚の爲、爲人度生の爲であるならば、如何なる落草談も、如何なる方便も、如何なる手段も、總て好箇の消息。――こゝに世間門で云ふ一場の戯劇、出世間門では法戰と云ひます、師弟混同の問答商量がある。多年此の一大事の爲に辛苦に辛苦を重ね、法に於て自在を得られた雪峰義存禪師が、弟子達に向つて、「南山に一匹の毒蛇が出たと云ふ評判である。其コブラにかまるゝと立ち處に死すると云ふ。おそろしい害虫。お前達、後學の爲に能く見ておくがよい。」と風なきに波を起し、落草の下化方便を弄せられた。すると長慶慧稜が、「私始め一山の大衆、コブラの話を聞いて驚愕至極、宛で死人の如く眞青になつてをります。」と答へました。諸君、慧稜禪師の此の答を何と判斷致します。是を賊、賊を知る、と云ひます。亦是れ兩狐同一穴。――右の問答商量底を或一僧が玄沙禪師の處へ持參して其意見を叩きました。「如何であります。あなたも大評判のコブラ見物にお出かけになつては。」と衲等が花見か山遊びに人を誘引する樣子。――コブラは南山に限りません。誘ふ人、誘はるゝその人がコブラ、――知るや知らずや。』――玄沙禪師云く、「稜君の如き剛氣な男なら、危險な處へ行つて見物するも敢て惡くはない。私は眞平々々。君子は昔より危きに近

よらずと云うてある。」玄沙禪師は慧稜君と同火の人であるから、稜兄の心底那邊にあると云ふこと、承知も承知、充分承知、故に恁麼に云はれた。問僧焉ぞ知らん玄沙禪師の胸中を。――あなたは何故に見物にお出でになりませんか。慧稜さんですら、――拙僧は往かん往かん。毒氣にあてられて死にたければこゝに居ても死なれる。殊更に貴重の時間を費して南山まで死に往く必用はない。――問僧は玄沙禪師のコブラに毒氣をかけられて半死半生の底。――話は前にもどる。雪峰禪師が、「汝等諸人、切須好看」と云はれた其時に、雲門禪師は拄杖を雪峰禪師の面前になげつけて、それそれコブラが出て來た。

――それそれそこに。――コブラの實物獨露嚴然。――禪機の大用底、三昧王三昧底。――之是の場合、――是之の眞境、――佛魔共に不可窺。――況んや其他のものに於てをや。倒退三千、――畢竟如何。汝等諸人、切須好看。――

◎頌

象骨巖高人不到、到者須是弄蛇手、稜師備師不奈何、
喪身失命有多少、韶陽知今重撥草、南北東西無處討、
忽然突出拄杖頭、拋對雪峰大張口、大張口兮同閃電、
剔起眉毛還不見、如今藏在乳峰前、來者一一看方便、
師高聲喝曰、看脚下、

象骨巖高くして人到らず。到る者は須く是れ蛇を弄する手なるべし。稜師も備師も奈何ともせず。喪身失命多少有り。韶陽今重ねて草を撥ふも、南北東西討ぬるに處無きを知る。忽然として突出す拄杖頭。雪峰に抛對して大に口を張る。大に口を張る閃電に同じ。眉毛を剔起すれば還た見えず。如今藏れて乳峰の前に在り。來る者は一々方便を看よ。師、高聲に喝して云く、「脚下を看よ。」と。

「象骨巖」雪峰山の別名。山の形體、象骨に彷彿たるが故に斯く云ふ。――「高人不到」山は高きに非ざれども仙あれば、と云ふ意味にて。象骨巖必ずしも人迹不到の高山ではない。されど、孔子の所謂三十にして立つと云ふ大悟底の足が立たなければ、平地すら歩行する能はず、況んや峩々たる壁立千仞の山に於てをや、と云ふ道理で、心眼の豁開してをらぬ人は、如何に冒險的の足を所持してゐても、這箇是れ妙峰頂と云ふ山には到底登ることは出來ぬ。――「須是弄蛇手」象骨巖には毒蛇がをる。故に毒蛇を恐怖する底の漢は登るべからず。苟も登山せんと欲せば蛇を弄する術を知らざるべからず。蛇を弄する術とは抑〻如何なる術ぞ。大死一番せざれば手には入らぬ。――

「稜師備師」稜師は長慶慧稜の事。備師は玄沙師備の事。必ず

しも稜師、備師には限らぬ。張三でも李四でも敢て不都合はない。權兵衛、太郎作でもよい。――「韶陽」雲門禪師のこと。雲門文偃の寺は韶州府附近にある。韶州を一名韶陽と云ふ。――「同閃電」蛇が赤い舌を出す、其のさまを形容したもの。衲僧家の活言句を吐く時も同閃電でなければならぬ。諸君、平生仕用の言句が一一同閃電や。――「剔起眉毛」目を見張るときの樣子。注意をすること。例せば高いものを見上げる時に口をあける、それと同じく、閃電の如きスバヤイものを見るときは是非とも眉毛を剔起する。』――「乳峰」雪竇山のこと。異說があるが、それは別人に問ふべし。衲は一箇の乳峰に固執しては居りませぬ。曇華の居る處、――諸君の居らるゝ處、即乳峰であります。』――「看方便」佛敎者の方便は一時の手段の如くに云ふ、それと同文字であるが、玆の處は大いに意味がちがふ。機略又は活策と見たら大過なからん。』――「師高聲」無論、是は記者の言。』――「看脚下」足下に注意せよ。有頂天になるな。足實地を踏まずして、幽靈歩きをする者が多い。石に躓くぞ。牛の糞を踏むぞ。いや、毒蛇がをるぞ。――

例に依つて重說を試みます。雪峰の象骨巖は高い。富士より新高よりまだ〳〵高い。普通の人はとても〳〵登ることは出來ぬ。――義存禪師の家風は銀山鐵壁、鐵壁銀山。何人も近傍

する能はず、徒らに遠望するのみ。されど、毒蛇を弄する伎倆ある底の人は、銀山鐵壁、豈恐るゝに足らんや。如何に象骨巖高しと雖も平地を行くが如く極めて易々たるのみ。果して恁麽の人ありや。雪後始知松柏操、事難方見丈夫心。』――――稜師、――――備師、我こそは、我こそは、と鼻孔遼天であるものゝ、愈〻象骨巖に足を向け義存禪師の面前に出ると、日下の燈。――――お話にならぬ。――――何れも蛇を弄するどころではない。一見して縮みあがる。――――雪竇禪師點檢して曰く、稜師、備師、不奈何、と。(雪竇禪師、若し我其の場に居らば別に手段のあるあり、と云はぬばかり。)稜師や備師すら縮みあがる位であるから、其の他の大衆は何れも毒蛇の話を聞いた計りで顏色土の如し。死人そのまゝ。象骨巖に登るどころか、義存禪師の面を見ず。其の名を聞いて、ハヤぶる〳〵。――――外で見て居て如何にもお氣の毒。――――こゝに居らるゝお互も或は毒蛇の話を聞いて死人同樣に靑くなる連中ではないか。毒蛇が毒蛇の話を聞いて靑くなるとは、如何にも不思議千萬であるが、事實であるから是又如何ともなす能はず。――――流石は雲門(韶陽)禪師だ。象骨巖はおろか、世界中の山々、天地間の谷々、藪と云ふ藪、草と云ふ草、東西南北、さがしても、鱉鼻蛇のをらぬ事をよく御存知。故に一本の拄杖を雪峰面前に抛擲して、それそれ

そこに鱉鼻蛇が、――それそこにコブラが。――大張口兮同閃電、宇宙を一口に呑却する大口を開き、萬物を一時に燒却する火焔を吐き、それそれ それ。――剔起眉毛還不見、どこに、と云うて眉毛を見張つて見ようとすれば、白雲萬里、コブラの影も鱉鼻蛇の形も知れぬ。――見えぬ。――見えぬ筈。知れぬ筈。――雪竇禪師曰く、如今藏在乳峰前。其の鱉鼻蛇、其のコブラ、昔の昔にちやんと拙僧の住居してゐる乳峰山に轉居してをる。――依然として大口を開き閃電の氣を吐いてゐる。昔の雪峰は今の雪竇、今の雪竇は昔の雪峰。――前三々、後三々。――何れも鱉鼻蛇、――何れもコブラ。

――諸君、其の鱉鼻蛇、其のコブラを一見したいとならば、見るに都合のよい方法を取りなさい。さて其の方法は、眼中童子目前人、水底金烏天上日。』心外に法なし、物皆我に備はる。』雪竇禪師大獅子吼して曰く、脚下を看よ。そら諸君の足の下に鱉鼻蛇が、――そら諸君の脚下にコブラが。――見んと要せば十萬八千。――

以上是で二十二則の提講は形の如く終了として、蛇に因んで蛙の珍話を添ふることに致します。高橋箒庵が、「箒のあと」と題して都新聞に毎日のせてゐました中から、(昭和八年四月十四日の分)蛙の行列と云ふ見出。

大正七年成金時代の一現象として、道具入札市場が空前の盛況を呈するや、書畫什具は勿論、金具、根付、緒締等、所謂袋物類も亦其値段を倍加し、其名品に至つては娘一人に婿八人、引く手數多の有樣であつた。處が、平岡吟舟翁は多年袋物蒐集の癖あり。此社會の珍品と云ふ珍品は大抵翁の手中に納り居たれば、袋物商は日々翁の許に詰めかけ、頻りにお拂下げを嘆願した。其頃大流行の加納夏雄作品中、天下一品と稱する蛙の行列は、細長き金具の表に十五疋の蛙を彫り、裏座に御婆子の葉を現し、裏座上に一疋の蛙を置きて、都合十六疋の蛙が大名行列を爲すの圖案であるが、夏雄は其意匠を鳥羽僧正の動物繪卷物より借りて來たものと覺しく、御婆子の葉にて作られた駕籠に乘つて居る親蛙を中心として、蒲公英、御婆子など樣々の草花を槍又は馬印とした同勢が、ぞろ〳〵と練り行く其姿を、或は赤銅、或は素銅、或は金銀、四分一等、樣々の金材に彫刻した彩色配合の妙、得も言はれず。夏雄が之を製作するに就き、如何に其苦心を費したるかを知るに足る。即ち夏雄作金具中の白眉であるから、從來諸方より懇望せられても翁は容易に割愛しなかつたが、京都の道具商、林新兵衛の一子政次郎が、江州八幡の大家淺見氏の依頼を受け、一萬圓にて是非とも之を讓り受けたしと云ふ申込みに對しては、父翁時代よりの出入道具商

でもあり、又此青年の爲めに花を持たせて遣らんとの思ひ遣りもありて、翁も遂に割愛するに決したが、此金具は眞に天下一品なれば到る處大手を振つて何人にも土下座せしむべし、とて、即座に紙片に書付けて渡された端唄は、

天下御免の行列が、お江戸を立つて上方へ、行く先々は下に居ろ、

と云ふのであつた。斯くて政次郎は此蛙の行列を得て、同業先輩にさへ舌を卷かせた光榮を祝せんが爲め、新舊所有主を始めとし其他袋物に趣味ある連中を請じて、一夕此金具披露會を催さんとするに就き、蛙の行列と云へる歌詞を私(高橋)に註文せられたから、私は右吟舟翁の端唄を土臺として早速一新曲を物したが、其文句中に蛙の言分として、

わしがしいをば何と見た、おありがたやのお婆さん、蓮のうてなにころげ出た、釋迦の涙と手を合す、

の一節があるので、其披露會日を釋迦降誕の四月八日と定め、蛙に縁のある三十間堀の某旗亭を會場として、會名を觀蛙會と名づけ、前記新舊持主の外數名を加へて、行列蛙の數と同樣、來客を十六人とした。扨て當夕は會場正面の床に灌佛會の花見堂を安置して、其中に彼の蛙の行列金具を陳列し、鳥羽僧正蛙合戰繪卷の一部を寫したる献立書に、蛙に縁ある川若しくは池

に産した料理の献立を列記し、水菓子に蛙卵とあるのを何物かと見れば、葡萄の實一つを椀に取りて之をお玉杓子に見立てたるなど、隨分奇拔なる意匠もあつた。而して此觀蛙會の餘興は、食前食後に亘つて珍藝樣々なりし中に、眞先に柳家小さんの素人芝居、蛙が青大將に恐入るの落語一席。次は猫八の物眞似、鳥獸蟲類聲色にて各種蛙の鳴き分けより、多數の蛙合戰の喧噪亂雜の狀を活現するに至りて、一座に蛙氣分を漂はせた。斯くて餘興の進むに隨ひ、次の間に掛け渡された踊舞臺の引幕が双方に開かるれば、當夜の主人政次郎が常盤津地語の首席に坐り、老妓連中をワキ、ツレにして、忍夜孝事寄、即ち平親王將門の娘瀧夜叉の一曲を語り出して、先づ來客の膽を奪ひ去つたが、光國瀧夜叉の大立廻りと爲りたる時、紙張の大蝦蟇が舞臺に飛出し、相馬錦の旗を兩人引張の見えを爲せば、此旗に一萬兩の文字あり〳〵と現れたる趣向、流石に大凝りの思付きであつた。扨て其次は愈〻新曲蛙踊で、雛妓十五人が子蛙と爲り、親蛙一疋がその中央に立つて之を統率する仕組だが、髪は天平式双髻にして、衣服も亦同式を用ひ、上に色衣詰袖の服を着し其下に袴を穿きて五彩燦爛あたり目映き十六人の蛙姫が、先づ舞臺に平伏して一齊にヒヨコ〳〵と這出し、四人一組、八人一組、文句に應じて樣々の手振りを爲し、最後に十六疋一齊總踊とな

りて幕となる面白さ。實にや春宵一刻千金とも云ふべき朧月夜に粋客の一會、今日より顧れば殆ど隔世の感を催さゞるを得ぬが、畢竟成金時代の好景氣を反映する一喜劇とて、當時の時代を知る一端ともなるべければ、ナンセンスの蛙物語を諄々と斯くなむ。』と高橋君は閑葛藤を喃々せられた。――心は萬境に隨つて轉ず。轉ずる處實に能く幽なり。蛙のときには蛙になれ。蛇のときには蛇になれ。寒のときは寒、熱のときは熱。――序に天童禪師が本則を頌じられた詩が從容錄に出て居る。其れを茲に記して本則の參考に供しませう。曰く、

玄沙大剛、長慶少勇、南山鰲鼻蛇死無用、風雲際會頭角生、果見韶陽下手弄、下手弄、激電光中看變動、在我也能遣能呼、於彼也有擒有縱、底事如今付阿誰、冷口傷人不知痛。』

仁者は山を愛し、知者は水を愛す。汝は荒草裡に行き、我は深林に入る。雪竇禪師は雪竇禪師の見識、天童禪師は天童禪師の見識。されど萬口同一舌、四海同一家。法に二法なし、理に二理なし。法と云ひ理と云ひ、古今一貫、東西一轍。雪竇禪師は雪竇禪師として、石は無根の樹を長じ、――天童禪師は天童禪師として、山は含む不動の雲。――閑話休題。

天童禪師の見識から一觀すれば、玄沙は大剛、長慶は少勇。――一長一短、玄沙は剛に失し、長慶は勇を缺く。過に非ざ

れば不及、兩人共に中道を踏みすべるや一なり。衲は云ふ。玄沙は大剛、玄沙にしてよし。長慶の少勇、長慶にしてよし。何が故ぞ。桃花は紅、――李花は白。――雪峰禪師拈出の鱉鼻蛇が兩禪師の爲に無用の死を敢てなさしめた、と天童禪師の鱉鼻蛇、うか〳〵すると一口に呑みこまるゝぞ。見よ、死んだと思うた鱉鼻蛇が鎌首を振り上げた。――風雨際會頭角を生ず。他日雲雨を得ば池中のものに非ず。大死一番、再活現前、鱉鼻蛇變じて大活龍となり、角を振り〳〵一滴の水を以て四天下に雨ふらす。是の如く死蛇を弄して活龍となさしむる者は誰。曰く、雲門禪師。――雲門以挂杖擡向雪峰面前作怕勢、是

が雲門禪師の活手段。所謂、手を下して弄す。死蛇に活を入れた。――古木龍吟、鐵樹開花、――活龍、二本の角を縱横自在に振り、激電光中、其の變化、其の出沒、其の隱見、見て眼にとまらず、聞いて耳にとまらず、只あれあれと云ふのみ。其の萬化底の神道、其の千變底の妙用、――天童禪師讃歎して曰く、我にあるや能く遣り能く呼ぶ、自受用三昧、――彼に於けるや擒あり縱あり、他受用三昧。――言句上、自と云ふも他と云ふも、自他の差別あるに非ず、所謂、一行三昧。――玆に到れば鱉鼻蛇と我と沒消息、――沒蹤迹。――死と云はんか死に非ず、活と云はんか活に非ず。――我をし

て如何が說かしめん。　說妙談玄太平姦賊、行棒下喝亂世英雄。』――凡夫若知即是聖人、聖人若會即是凡夫。』――此鰲鼻蛇の置物、即今何人に付與したものか。畢竟、與ふることも受くることも出來ぬ。下手に與ふれば鰲鼻蛇が死んでしまふ。下手に受ければ喰ひ殺される。それを知らずして人に與へたり他から受けたりする者がある。笑ふべし。否、悲むべし。』

――何人でも一生に一回は鰲鼻蛇に必ず喰ひ付かゝるぞ。――喰ひ付かるゝがよい。「冷口人を傷つくれども痛を知らず。」名刀で切らるゝと痛みが解らぬと同樣で、鰲鼻蛇が冷かなる口を以てガブリと喰ひ付いても、餘りに毒が多いために痛みが知れず、喰ひ付かれても平氣で居る人が多い、と天童禪師嘆息さるゝが如何にも〳〵。諸君、若し鰲鼻蛇に喰ひ付かるゝならば徹底喰ひ付かれて死ぬがよい。一遍死ねば、二遍は死なぬ。死なゝければ死の味はわからぬ。死は決して思ふほど苦しきものに非ず。されど衲は云ふ。我より進んで鰲鼻蛇を喰ひ殺せ。否、鰲鼻蛇を一口に喰ひ盡してしまへ。現今鰲鼻蛇を喰ひ盡す底の人ありや。――刮龜毛於鐵牛背上截兎角於石女腰邊。――

多言多謝。――

（昭和十二年六月十九日講演）

第二十三則　保福長慶遊山次

本則を普明國師頌して曰く、妙高孤頂白雲中、只是礙人荆棘叢、不得二師俱惜許、爭知一路向玄通、と。轉結の二句、着目すべき處。古人を御手本としてお互が一路向玄通となる、それが修行、それが研究、それが肝心。その心して本則に實參して實悟なさるべし。

◎垂示

垂示云、玉將火試、金將石試、劍將毛試、水將杖試、至於衲僧門下、一言、一句、一機、一境、一出、一入、一挨、一拶、要見深淺、要見向背、且道、將什麽試、請擧看、』

讀方

垂示に云く、玉は火を將て試み、金は石を將て試み、劍は毛を將て試み、水は杖を將て試み、衲僧門下に至つては、一言、一句、一機、一境、一出、一入、一挨、一拶、深淺を見んことを要す。向背を見んことを要す。且く道へ、什麽を將てか試みん。請ふ擧す看よ。』

「玉將火試」玉の好惡、玉の良否、それは火を以て試驗するが上策である。火に入れて轉た鮮明なものであれば明玉、寶珠。——お互所持の心玉は何を以てか試驗すべき。破布囊裏眞珠、

知者方識是寶。――――一箇づゝは誰も所持して居る。所持して居りながら知らずに居る人が多い。――――「金將石試」金の眞僞、金の純不純、それは石を以て試驗すべしと云ふ。鐵は熱して居る中、と云ふ。金は眞金、純金であれば、敢て熱不熱に關係はない。眞金火に入つて色轉(うた)た鮮かなり、と云ふことがある。』お互の金剛心は眞物か僞物か、將亦(はた)純か不純か。元より眞物にして純。それが一變再變、更に變じて、即今或は僞物中の僞物となり不純中の不純でなければ幸甚々々。――――「劍將毛試」支那の名劍、其の有名なるものは干將(かんしやう)、鏌鋣(ばくや)。日本の名劍、其の優物なるものは正宗、長船。何れも馬觸るれば馬を切り、人觸

るれば人を切る。されど、眞箇の切れ味を見んと欲せば、毛を以て試驗するに如くはなし。お互固有の那一刀は如何なるものを以て試驗すべきや。富貴、貧賤、威武、之是を以て、タメセば、鈍刀か利刀か一見辨見することが出來る。雪後始知松柏操、事難方見丈夫心。――「水將杖試」水の好惡ではない、水の深淺である。正雪の同志者に加つた丸橋は城外お堀の深淺を試驗する爲に投石した、と云ふことを聞いてをる。杖を以て試むる、それも水の深淺を計る一例である。お互性海の深淺は何を以て試驗する。佛と云ふ竿、祖と云ふ杖、何なりとも御隨意の品を以て、自分と自分で試驗をなさい。無業一生莫妄想、瑞巖(ずいがん)只喚(よぶ)

主人公。――以上申し上げた外に、玉、金、劍、水等につき出所來歴は澤山ありませう。納は淺學でありますから、餘は省略致します。「衲僧門下」衲僧とは禪僧のこと。廣義に云へば總ての僧の代名詞。衲は、衲僧と云ふことは禪僧のことなり、と獨りできめて居ります。其の禪僧仲間での試驗のやり方は、世間普通のそれと少々趣を異にしてをる。大體禪僧は（目下は然らず）既に膩脂帽子を拈却し、鶻臭布衫を脱却し、――毘盧頂顆を坐斷し、曾て佛祖あるを見ず。――されど人間である、決して木石ではない。――血もあり涙もある。曰く、佛は涙と血の結品、（涙は仁涙、血は義血、）衲僧は佛の小なるもの。血

あるは元より、涙ある、豈あやしむに足らんや。――「一言一句」讀んで字の如く、別に說明の必用なし。强ひて云へば、おはやう、おやすみ、それが一言であり一句である。――「一機一境」望烟乞食歸、』――飲水知地脈、』――好和聲便打、』調高賞音稀、』――賓主互換、』――人境俱不奪、』――明暗雙々。――「一出一入」出爐鞴而放光、入鉗鎚而成器。』――把住黃絹幼婦、放行外孫虀臼。』――登山則戮虎豹、入水則斬蛟龍。』――必ずしも然らず。一擧手一投足、一居一動、左之右之、お互が平生なしつゝある其の現成底、其の實際的、それであります。――「一挨一拶」輕く觸れるが挨で、强く觸れる

が拶である、と古來よりの說。云ひ換へれば、手輕にする方が挨、
――手重くする方が拶。廣義に云へば、一言一句、一機一境、
一出一入、總てに於て挨の場合、拶の場合があります。要する
に人間のする事柄は悉く一挨一拶ならざるなし。――「深淺」
是は悟得底の深淺、禪河の深淺、智水の深淺。丈夫自在衝天氣、
不向如來行處行。』是は深き方。――自笑一生無定力行藏多
被業風吹。』是は淺き方。――お互は深き方か淺き方か。衲
の如きは淺き方。――「向背」向は已悟、背は未悟。――向
は悟りと握手、背は悟りと絕緣。――吾奴不識錦囊重、裏得
青山暮色歸。之是を向と云ふ。寸步却成千里隔、紛々多在半途

中。之是を背と云ふ。諸君は向の方か背の方か。衲は例に依つ
て背の方である。――以上一括して
一言添へて措きます。』終日說いて未だ曾て說かず、終日行じて
未だ曾て行ぜず、と云ふ境界の人と、行亦禪、坐も亦禪、語默
動靜體安然、と云ふ已到の人と、兩々相對する時は、所謂、相
逢うて相知らず、共に語つて名を知らず、兩鏡相對、それの如
く中心影像なし。彼れ彼に非ず、是れ是に非ず、而して彼は彼
にして是に非ず、是は是にして彼に非ず。――されど、恁麼
の靈境に到達せざる修行者、人を試みるも、人に試みらるゝも、
何れも切磋琢磨。此の點から云へば、試し試さるゝは成るべく

多きがよい。圜悟禪師垂示して曰く、玉の善惡を鑑定するには、火で燒いて見れば玉の善惡は當處に明瞭になる。』金の眞僞を鑑定するには、石でスッテ見れば金の眞僞は速かに分る。』劍の利鈍を鑑定するには、毛を吹いて見れば劍の利鈍は隱す能はず。』水の深淺をはかるには、竿を水中に立てゝ見れば水の深淺はいやでもわかる。以上は枕詞、云はゞ本文の前提。其本文、其目的は禪僧それにある。禪僧の精神的修養の有無を鑑定するには、(名のみの禪僧でなく、名實共に禪僧、)玉、金、劍、水を鑑定する方法と同一の鑑定方法がある。それは、その人の一言一句、一機一境、一進一退、一挨一拶、それで仔細に檢査して見ると、其人が悟つて居るか悟つて居らざるかは無論のこと、其悟りの深淺、廣狹、長短、厚薄等が掌中に物をのせて見るが如く明々白々にわかります。左に一言一句を以て試驗なされた一例を擧げて、餘の一機一境、一出一入、一挨一拶は是に準じて御承知を願ふことに致します。――秋野師の碧巖集講話に出て居ります。英國の或商會で內部が不整理極まつて商會の運命も危くなつた時、社長は此際整理の難局に當る人物を得んとて二人の候補者を得た。そこで此二人を別々に引見して見た。其時社長は試みに、此人等が戸を開けて入るや否や、「貴樣のやうなものは役に立たぬ。」と叱りつけた。處が最初の人は大いに怒

つて戸を蹴つて出て行つたが、後の人は頭を下げ禮を述べて靜かに戸を閉ぢて出て行つた。社長は直ちに第二の人を採用して、將に破産せんとする悲境より商會を救うた、といふ。』これは即ち一言一句にて試驗をしたのである。序に思ひついたから、孟敏のことを申し添へて見ませう。たしか後漢書列傳の五十八に出てをると記憶して居ります。大原に孟敏と云ふ人が食客となつてゐた。或日のこと甑を荷つて行くと、圖らずも取り落して破つてしまつた。普通のものなら、大變なことをしたと騷いで、駄目と知りつゝ繼ぎ合せたりなどするものである。然るに孟敏は後をも振り向かずに去らうとするのを、郭林宗と云ふ人

が見て其意を問ふと、對へて云く、「甑已に破れぬ。之を視るも何の益あらん。」と。林宗その大度量に惚れ込んで學資を出して勉强させたと云ふ。これ即ち一言一句の試驗である。序に潙山禪師のことを云うて見ませう。司馬頭陀、湖南より來り百丈禪師に謂うて曰く、近頃湖南に一の山を尋ね得たり、大潙と稱す。是は一千五百人の善知識を養育するに適當の處であります。』すると百丈禪師曰く、老僧住し得るや。陀曰く、禪師の所居する處に非ず。百丈曰く、何が故に。陀曰く、禪師は是れ骨人、彼は是れ肉山、故に不可なり。百丈曰く、吾が大衆中に其の肉山に所居する人ありや。陀曰く、大衆を歷觀せん。時に花林覺、

第一座たり。百丈、侍者をして花林覺を召し來らしむ。百丈問うて曰く、此人如何。陀、聲咳一聲、且つ行くこと數歩せしむ。陀曰く、此人不可なり。百丈又靈祐を喚び來らしむ。時に典座(御飯焚)たり。陀、一見して曰く、此人正に是れ溈山の主人公なり、と。――恁麼に似たる例は澤山あるが、今は略す。即今一言一句の簡單なるもので禪僧を檢査する方法は本則に依るが何より近路。宜しく去つて參究せよ。

◎本則

舉、保福長慶遊山次、福以手指云、只這裏便是妙峰頂、慶云、是則是、可惜許、雪竇著語云、今日共這漢遊山、圖箇什麼、復云、百千年後、不道無、只是少、後、舉似鏡清、清云、若不是孫公、便見髑髏遍野、』

讀方

舉す。保福長慶遊山せし次、福手を以て指して云く、「只這裏便ち是れ妙峰頂。」慶云く、「是は則ち是なり。可惜許。」

雪竇著語して云く、「今日這の漢と共に遊山して、箇の什麼をか圖る。」復云く、「百千年後無しとは道はず。只是れ少し。」後に鏡清に舉似す。清云く、「若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏野に遍きを見ん。』

保福、長慶、鏡清、何れも雪竇禪師の弟子。

保福、漳州保福院從展、――俗姓は陳、出生地は福州。
長慶、福州長慶寺慧稜、――俗姓は孫、出生地は杭州。
鏡清、杭州龍丹寺道怤、――俗姓は陳、出生地は永嘉。

以上三人の兄弟が遊山の途中、互に試み試みらるゝ一大法戰である。「遊山次」次は時と云ふ意に用ひるがよいと云ふことである。山あそびをする時。――「妙峰頂」此の妙峰頂は理想の頂。佛教哲學の譬喩說。善財童子が文殊菩薩の指圖によつて德雲比丘と云ふ佛教の大哲學者を訪尋したと云ふ由來のある古事。此の妙峰頂を秋野師が婆心を以て婆口を弄せられた一節がある。玆に拜借して諸君と共に翫味致しませう。秋野師曰く、

「妙峰頂とは一味平等の法のことを云うたのだ。それは何かと云ふと佛法である。或は之を眞如と云うてもよい。千差萬別の世界の現象界は皆是れ眞如の現れである。そこで我々は皆この妙峰頂の上を歩いて居るではないか。諸君の朝から晩までの仕事も悉くこの妙峰頂を外れて居らぬ。この妙峰頂の本體を離れたものは一つもない。然るに妙峰頂と云へば別に離れて遠くにあるやうに思ふ人がある。禪の話は總て人々の脚痕下のことだ。油斷してはいかぬ。誰でもこの妙峰頂のことが分れば安心決定ができる。」とあるが如何にもさうである。――「可惜許」唐宋時代の俗語で、まだなか〳〵、の意である、と井上君は云は

れる。可惜許。――惜むべきかな。平たく云へば、まだ〳〵許すことは出來ぬ。――何が故に妙峰頂と云ふ名をつけた。實を云へば妙峰頂と名をつけなければよかつた。――「圖箇什麽」智音同士の遊山であるから、第三者から彼是と云ふ必要はない。されど、山の趣を知る人は山に通じたる人、川の趣を知る人は川に達したる人。保福、長慶の兩人は、禪の人、悟りの人。遊山して何事をか圖る、遊山なぞは要するに無駄事ではないか、と雪竇禪師は抑下した。――「百千年後不道無只是少」妙峰頂の本體は、見ようと思うて見えるものでなく、聞かうと思うて聞かるゝものでない。故に百年探しても、千年探し

ても、探し出せるものでない。とは云ふものゝ、妙峰頂を探尋する其人が眞箇の妙峰頂そのものになれば、即處即時が妙峰頂現前。――そこまで修行の出來る人は、絶無とは云はぬが極めて少い。至つて稀である。――「孫公」長慶慧稜禪師の俗姓。孫公と云へば長慶禪師のことである。――「髑髏遍野」二説あります。其一は、髑髏を支那文學上では、日本で云ふ「はりこの虎」「假面の天狗」「影辨慶」と云ふ意に使用してをる、と云ふ井上君の説。如何にも面白い。是に依りて説明すれば、孫公があつたがために木ツ葉天狗が影を隱した。若し孫公が無かりせば假面の天狗が肩で風を切ることであつたらう。』其二は、「誰

でも一度は髑髏になる。なつた髑髏が髑髏のまゝでゐては何にもならぬ。其の死したる髑髏が生きなければ役に立たぬ。世間には死んだ髑髏ばかりで生きた髑髏が少い。楠公さんや乃木さんの髑髏は死んでも死んでをらぬ。生きてをる。孫公は流石雪峰禪師の會下だけあつて、是は即是、可惜許、と云うて、死んだ髑髏に活を入れて生かした。」是は秋野師の說。以上の兩說、春蘭秋菊、彼も好し是も不可なし。――更に上來を總括して簡單に重說を試みます。玆に禪坊主が遊山をしながら禪學問答をした面白き一幕の喜劇がある。『禪そのものゝ第一義と云ふ處に立脚すれば、法海理地不立一塵で、一切の差別、一切の事業、一切の相對は電拂の如く空華に似たりである。――されど第二義と云ふ、爲人度生、下化門の處から歩を運べば、佛事門中、不捨一法で塵々刹々是黃金。捨つべきもの一つもなし。總てが入用、一切が必要。凡そ禪坊主たるものは造次にも顚沛にも下化衆生三昧でなければならぬ。保福と長慶は下化三昧であつたか、なかつたか、それは別として、とにかく山遊びされた事は實際である。』時は春であつたか、夏であつたか、秋か冬か、其處は敢て研究する必要はない。――今日で云ふ遠足運動と云ふことにして置きます。遠足運動、老人でも決してわるくはない。小學生徒などは一週間も前から其日の來るのを樂しみにし

て居る。小供は無邪氣で佛樣か神樣のやうである。禪坊主も修行中は小學校の生徒と同じく一定の規則に壓迫され、勝手氣儘に遠足運動や野外散歩が出來ません。故に一年に一回か二回、勝手氣儘の出來る遠足運動日ときては、それはたまらない。多年籠中の鳥、今日雲を負うて飛ぶの感あり。――保福、長慶、歩々清風を起しながら、山色清淨身とか溪聲廣長舌とか、互に胸襟を語りつゝ行く途中、保福、突然手を以て或地點を指し、「アソコに例の妙峰頂がある。」と自己の悟境を採り出して、長慶の手許如何と試みた。すると長慶、「臭いぞ臭いぞ坐禪くさいぞ。お悟りくさいぞ。遊山しながら鹿爪らしいことを云ふな。世間を

外にして出世間なく、平等を除いて差別はない。差別即平等、出世間即世間、殊更に妙峰頂などゝ平地に波瀾を起すやうでは、君のお悟りは未だ極地に到達してをらぬ。可惜許。」――茲に挿畫を添へて置きます。

從容錄の第四則、世尊指地の話があります。この話に例の萬松老人が示衆して曰く、

一塵纔擧大地全收、匹馬單槍開疆展土、便可謂隨處作主遇緣即宗底、是甚麽人。』

「一塵纔擧云々」須彌の中に芥子を容るゝは當然のこと。其の反對に芥子の中に須彌を入れるは少々不自然。其の不自然と思

ふ不自然が寧ろ當然で、當然と思ふ當然が却つて不自然である。知るべし。極大は小に同じ。極小は大に同じ。此立場から一塵纔擧云々と云うたものである。――「匹馬單槍云々」痩せ馬に騎つて錆槍一筋で天下を占領したと云ふ英雄も廣い世界に無いではない。日本の木下の如き、西洋のナポレオンの如き、まだ澤山ある。そのやうなことは難事と云へば難事であるが、難事中の小難事で、決して眞箇の大難事ではない。眞箇の大難事は、隨處作主云々。是が極めて難事である。身に寸鐵を佩びずして隨處に南面し人の尊敬を受けその場その場で宗に即する底の人でなければ、眞實本分底の人とは云はれぬ。かやうな人は畢竟

何人なるぞ。――　從容錄の本則に曰く、

世尊與衆行次、以手指地曰、此處宜建梵刹、帝釋將莖草挿於地上云、建梵刹已竟、世尊微笑。』

これは楞嚴經に出て居る話を天童禪師拈來して一則の公案とされたのである。』――　保福と長慶と山遊びをなしたるが如く、釋迦如來も大衆を引きつれて一日遠足運動をなされた、其時の出來事である。世尊、手を以て或一方の地點を指して曰く、ア、あの處は高臺で後に山を負ひ、前に海をひかへ、在俗の家屋には離れてをるし、寺を建立するに適當な處だ。――　すると帝釋、如來の胸中を洞觀して一莖草を將つて地上に挿んで云

く、梵刹、お寺を建てまして御座る。――――長慶は「是は則ち是、可惜許。」と蹴倒しました。然るに釋迦如來は帝釋の復命を聞いて微笑せられた。サア諸君、釋迦如來の手腕と長慶の手腕と、何れが是、何れが不是。――――釋迦如來の「此處宜しく梵刹を建つべし。」と、保福の「只這裏便ち是れ妙峰頂。」と、何れが當然、何れが不當然。――――此處はお互が親切に研究すべき處であります。挿畫の話はこゝまで。』

聊かでも隙があれかし、と隙をネラツテ居る雪竇禪師、「今日共這漢遊山、圖箇什麽。」何だ禪坊主のくせに世間の人と同じやうに遠足運動、――――それよりは禪堂で坐禪をしてをれ。如

何なる心底で野外散歩をしてをるかと思うたら妙峰頂、――――妙峰頂が君等にわかつてたまるものか。妙峰頂を我がものにする人は百年か千年の間に無いとは云はん。只是少で多人數はない。(即今茲に一人雪竇がをると腹中で云はるゝが、果して眞箇の妙峰頂がお手に入つて居る乎。)――――保福は長慶を試驗せんとして還つて自己が試驗されたのみか、美事に落第、大いに失敗。此面目を取りかへさんものと、兄弟の鏡清の處へ持參して、共鳴を得ようと思うて山遊びの時の一件を委細説明すると、鏡清云く、「流石は孫公だ。見識が高い。君の持つて居る妙峰頂などはお話にはならない。長慶の云はれた、是則是、可惜許、

は君に對して眞箇の適評。――若し君の所持して居る妙峰頂を、尤もだ、然りだ、と云うて是認しやうものなら、乙も丙も丁も妙峰頂々々々で、世界中木ッ葉天狗だらけになる。幸に孫公のあるあつて、死した髑髏が活氣を催して來た。』――畢竟妙峰頂とは如何なる處か。――如何なる事柄か。――這箇是妙峰頂。

◎頌

妙峰孤頂草離離、拈得分明付與誰、不是孫公辨端的、髑髏着地幾人知、』

讀方

妙峰孤頂草離々。拈得分明、誰にか付與せん。是れ孫公の端的を辨ずるあるにあらざれば、髑髏着地、幾人か知らん。』

「妙峰孤頂」是は平等一味の本體、本性にして、智慧に屬す。人格的で云へば文殊菩薩、物に喩へて云へば般若の名劍。――お互は般若の劍も必要、――文殊の智慧も入用。――「草離離」是は差別萬象の現相妙用にして慈悲に屬す。人格的で云へば觀世音菩薩、物に比して云へば如意の寶珠。――元より如意の寶珠はなかるべからず。觀世音菩薩もなかるべからず。更に云ふ、「平等が即差別、差別が即平等。」「智慧が即慈悲、慈悲が即智慧。」智慧の大なるほど慈悲も亦大なり。慈悲の廣きほど智

慧も亦廣し。平等の清明なるほど差別も亦清明。差別の深細なるほど平等も亦深細。云ひ換へれば、差別、平等、二にして一つ、一つにして二。智慧も慈悲も亦復然り。――「拈得分明」分明はハツキリ。拈得は捧ゲ出ス。不得要領でなく徹底的に、確實具體的に、公衆面前へ捧げだした。何物を。妙峰頂を、宇宙の實體を、本來の面目を。――「付與誰」如何なる人にやるつもりだ。眞箇の妙峰頂は與ふることも受けることも出來ぬ。然るに分明に拈得して付與しようと云ふやうな妙峰頂は僞物だ。僞物の妙峰頂は誰が頂戴するものか。盲目千人と云ふが、眼明も亦千人をるぞ。――「辨端的」眞意、目的、玉のおち場、

それが端的。其端的の正邪眞僞を辨別する、それが辨端的。此の句は何れの方面にも使用の出來る文字である。「知數摩醯難辨色入楊綠矣入花紅。」是は端的を辨じ得ざる底。――「風送斷雲歸嶺去月和流水過橋來。」是は端的を辨じ得たる底。――「着地」地を覆ふと云ふ意。捧讀にヂヤクチと。大地一面、地上一杯、ドコモカモ。――右を一括して曰く、妙峰頂には草が離々と繁茂して居るから、保福の如き、悟道の眼目が豁開してをらぬ者には、妙峰頂の全體はわからぬ。保福ばかりではない。悟道の眼目なき人は如何なる學識高遠のお方でも、見ようとし聞かうとしたら、妙峰頂は見えぬ聞えぬ。――知るべし、

草離々の處が妙峰頂、妙峰頂は草離々、――拈起則佛祖不識、放下則草木發榮。』――妙峰孤頂草離々。――歸家擔子兩頭脫、柴自青兮火自紅。――妙峰孤頂草離々。――然るに保福の青小僧、斷定して曰く、這箇便是妙峰頂、なぞと。』釋迦如來が地を指して、此の處宜しく梵刹を建つべし、と大獅子吼なされた古智を學んだとて、眞箇の妙峰頂は出現するものではない。眞箇の妙峰頂は、心外にもなければ心内にもない。いや心内にもあれば心外にもある。あることはあるが、這箇便是妙峰頂なりと云ふ安價のものではない。そのやうな安價のお悟りは、入梅の雨氣に逢ふと腐敗して害こそのこせ、すこしも益にはならぬ。只で進呈しても貰ひ手がない。――處が世の中は不思議なもので、無代償で頂戴が出來るなら、と云ふ小慾の大馬鹿ものがある。幸に長慶の如きは保福の試驗網にかゝらなんだ。のみならず保福の心中を見拔いて、一躍に躍倒して曰く、「是則是、可惜許。」是が所謂、法令親なし、仁に當つては師に讓らず、と云ふ處だ。一歩も讓つてはならぬ。この見識の越格なるを見て鏡清曰く、「若不是孫公見髑髏遍野」と、長慶が保福を蹴落した、其の蹴落し方が的中して居る、と云ふことを更に證明された。保福は重々の敗缺。――泣面逢蜂。――雪竇禪師は鏡清の代理人となり、轉結に、「不是孫公辨端的、髑髏

着地幾人知」よかつた〳〵。幸に孫公がをつたからよかつた。若し孫公がをらなかつたら、三千大千世界、全宇宙、木ッ葉天狗の住宅となつて、甲も妙峰頂、乙も妙峰頂、丙も丁も妙峰頂々々々、で妙峰頂の競進會、否、妙峰頂の捨賣、――妙峰頂の只賣、――それになる處であつた。――敢て云ふ。廣い世界に妙峰頂の實體本性を體得した者が幾人あるだらう。重ねて云ふ。妙峰頂は高い高い。妙峰頂は低い低い。低いと思へば高い。高いと思へば低い。――是法平等、無有高下。――序に天童禪師、本則を頌じられたその頌を添へて置きます。曰く、百草頭上無邊春、信手拈來用得親、丈六金身功德聚、等閑携手入紅塵、塵中能作主、化外自來賓、觸處生涯隨分足、未嫌伎倆不如人。』

夾山禪師の垂示に、「百草頭上に老僧を薦取せよ。」又或る禪師の句に、明々たる百草頭、明々たる祖師の意、とあります。天童禪師の所謂、百草頭上無邊春、と同工異曲、異曲同工。――春になれば春光が千草萬莖の上に凞々として輝く、それが妙峰頂。――夏になれば千樹萬木の上に森々として萠えづる。それが妙峰頂。――秋になれば千山萬岳の上に重疊として紅なる、それが妙峰頂。――冬になれば雪千山を覆うて白皚々、それが妙峰頂。――無門禪師云く、「春有百花秋有月、夏有涼

風冬有雪若無掛閑事心頭便是人間好時節。」便是人間好時節、是が眞箇の妙峰頂。――――手に信せて拈じ來り用ひ得て親し。拈じ來れば一として妙峰頂ならざるなし。拈じ來るそのまゝが法幢とも大法殿ともなる。諸君、この拈じやうを研究して頂きたい。用ひ得て親しくなるには多年の修養を要します。――――「丈六の金身功德聚」拈じ得て親しきときは、百草千莖の一々が即丈六の金粟如來、此の娑婆世界が即佛の全身、それを功德の聚と云ふ。云ひ換へれば、お互が功德のかたまり、お互が妙峰頂の變身。それを知らずに、甘んじて下劣の漢となり、好んで三界を輪廻してをる。思へば自分ながらお氣の毒のことであ

ります。――――「等閑に手を携へて紅塵に入る」是は釋迦如來が、瓔珞細軟の衣を脱し、麁幣垢膩の衣を着け、下化衆生の三昧底。大事未了の漢が恁麼の眞似をなさば、俗情に繫縛されて微動だも出來ぬ。御用心々々々。――――「塵中能く主と作り」隨處に主となり緣に遇うて宗に即することが肝要である。修行は是がためである。徒らに高慢を振り廻すための修行に非ず。初入の學者、綿密如法に一歩一歩順序を亂さず正しく進むべし。――――「化外自ら來賓す」塵中能く主と作り得るが故に、天界の帝釋天まで來降して、佛の化度をお世話なしくださる。――――天童禪師は以上の六句で本則を頌じ了れり。更に二句を添へて學人

に頂門の一針を加へられた。お互は學人であるから頂門の一針をありがたく頂戴致しませう。「觸處生涯分に隨つて足る」見よ、歩行に不自由の無いやうに足が二本あるし、物を執捉するには手が二本ある。眼耳鼻舌、身チヤンと六根具足してをる。飢うれば食ふ。困すれば睡る。人間到る處青山あり。何處へ行つても不自由はない。西洋各國は無論のこと、天堂へ行つても地獄へ行つても、決して困らない。禁物は不平の心と不足の心。是があつたら何れの處へ行つても不自由千萬、それが無ければ何處へ行つても生活は出來る。分に隨つて足、とは其のこと。

――知者とは自己を知る。是を大知者と云ふ。悟者とは自己を悟る、是を大悟者と云ふ。――自己を知るべし。自己を悟るべし。――「未だ嫌はず伎倆の人に如かざることを」眼は横に、鼻は縱に、足は運奔、手は執捉、毫も他の伎倆を羨むに及ばぬ。(伎倆は造作のこと。)甎を磨して鏡と作す、是れ伎倆。――坐禪をして作佛する、是れ伎倆。――一莖草を挿み梵刹を建立する、是れ伎倆。――這箇便ち是れ妙峰頂と云ふ、是れ伎倆。――伎倆は伎倆の爲の伎倆。所謂、風なきに波を起す、それでは不自然。不自然は正道に非ず、邪道。――不自然は正法に非ず、邪法。――禪は正道にして且つ正法、故に自然。決して不自然ではない。――其自然底如何。人々自己の光明

あるなり。帝釋天の眞似をして一莖草を拈出して、それが何になる。――眞似は釋迦如來の眞似でも眞似は眞似、決して本物ではない。――眞似の千は本物の一に當らず。僞物は見て飽きる。本物は見れば見るほど美事である。――聞かずや、自己の胸襟より。――知らずや、外より入るものは。――故に衲は云ふ。人を試驗せんと欲せば自己を試驗せよ。自己を試驗せんと欲せば先づ以て自己の光明を發揮すべし。自己の光明とは、觸處生涯分に隨つて足る、それぞれである。自己生涯分に隨つて足るを忘却して他人の伎倆を羨み他人の伎倆を眞似する人は、終世他人の塵を仰ぎ、一生眞似の奴僕。――實に

見下げたる人である。――寧ろ鷄口となるとも牛後となる勿れ。我亦千佛の一數、――這箇是妙峰頂。――

（昭和十二年六月二十六日講演）

385
755

昭和十三年七月十三日印刷
昭和十三年七月十八日發行

發行兼印刷者　佐々木四郎
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社內

發行所　東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考査課

終